

# 時評

そろそろ鎧と胃を脱いだら、どうですか

—— 小沢一郎さんへの手紙

武村 正義

(元蔵相・官房長官)

小沢さん！燃えるような暑い日が続いています。お元気でしょね。

私は、昨夜は家族といっしょにびわ湖の花火を観ていました。一時間に凝縮された湖上の夜の「光の芸術」はみごとでした。花火はいつも消えていく瞬間が美しい。小さな可愛い花火も、びわ湖の空をおおいっくすような大きな花火も、いさぎよく燃えて消えつくる瞬間に引きつけられました。

ところで、私には一発一発の花火が今年には人の生涯に重なって見えました。お釈迦さんは、この世のすべてはうつろいと説かれた。人の世には必ず終わりがある。一瞬の花火と同じですね。私たちはこの世に忽然と現れ、多くの人と喜怒哀楽を交歓し、また時がくれば、忽然と消えていく、存在です。悠久の時の流れからすれば、まことにはかなく短いのが人の命です。数秒の花火も数十年の人の生涯も変わりはありませんね。

さて小沢さん。あなたは日本の政治のど真ん中で、よくぞ長い間頑張りつづけてこられました。細川内閣の当時を思い出しても、あの頃の中心メンバーはほとんど今の政界には残っていません。そう思うと、小沢さんは、幾度となく試練をこえて立ち上がった戦いつづけてきた稀有の戦士です。それだけでも敬意に値します。そのうえあなたにはもって生まれた人間的な魅力もありました。「口が堅い」「約束は守る」この二つだけでも、私は見上げた人だと実感しました。

さて、私がここで小沢さんに申し上げたいのは、「そろそろ鎧と胃を脱いで、自由の身になられてはどうですか」ということです。

人はみな、ことを始めるより、ことを終えることがはるかにむずかしい。私も政治を辞めるときは、ずい分と逡巡しました。朝、昼、晩と考え方がゆれ動いて、迷い苦しみながらやっと引退を決意できました。私には健康の不安が大きいのしかかっていましたが、それでも決め手になったのは、自分の命は有限なのに、この世の政治は永遠につづいていくことに気がついたことです。この世に人が生まれて、政治が始まった。この世に人間が生きてつづけるかぎり政治に終わりは無い。「自分がいなければ仕事は進まない」「自分が辞めたら困る人が沢山いる」というような考えはどこかへふきとびました。

小沢さん！あなたはもう六十八歳ですね。私は六十歳半ばで自分の健康にかけりを感じ始めました。小沢さんも自分の健康のことや寿命のことを考えはじめているにちがいないと思って、私はこの文章を書いていきます。人間は、寿命を考えはじめると、当然のように「今の仕事はいつまでつづけられるか」と考えます。

時代は動いていきます。どの世界もベテランは若い人に席をゆずっていくことでこの世はなっています。新陳代謝です。それを間違えると「盛者必衰」の悲劇になります。

率直に言って、最近の小沢さんは颯爽とされていた二十年前と大分印象が変わってきましたよ。

第一に小沢さんをめぐるおカネの矛盾が顕わになってきました。国民は刑事事件の白黒だけに関心をもって見るではありません。一人の政治家をめぐって億単位のおカネが動いていることやそれが不動産の売買にまで及んでいることに疑念を感じています。

第二は、「日本改造計画」を発表された頃の小沢さんの面影は、すっかり消えてしまったことです。「自立自助」を説き、「普通の国」を唱え、消費税の10%論を堂々と展開された小沢さん。すべてに賛成はできませんでしたが、それでもメリハリのきいた頼もしい政策の小沢一郎さんでした。最近はこのようにしたイメージは影をひそめて、安全保障や消費税論は当時と正反対の主張をされているように映っています。そうでなくても選挙と政局の小沢一郎ばかりが目立っています。

第三は、小沢さんに余裕がなくなってきたのか、ラジカルに見える政治行動が増えてきました。小選挙区制や二大政党制を唱えていた小沢さんはどこへ行ったのか。最近では、あなたの民主党や国会の運営ぶりを見てみると、他の政党の存在を許さない一党だけの永久政権をめざしているようにも思えました。あなたにとっては、

私心なく全力投入の日々だったのかも知れませんが、遠くからみていると不自然に映っていたし、何となく穏やかさがなくなってきたように見えました。

そろそろ時代はあなたをこえて動きだしているのかも知れません。あなたに対する国民世論も肯定から否定に微妙に変化してきているように思えます。

小沢さん！あなたには、自分自身に向かって、最大で最後の決断をする時が迫ってきているではありませんか。そろそろ武装を解かれて、静かで平凡な日本人の一人に戻ってください。びわ湖のほとりから、「情と理と根性」の小沢一郎さんにエールを送って、筆をおきます。

